

実践報告

高等学校の中国語教育における主体的な学びの実践報告

A Practical Report of Active Learning in Chinese Education at High School

田村 新

Arata TAMURA

Key words : 高等学校, 中国語教育, 主体性, 学習活動

0. はじめに

2009年に公示された『高等学校学習指導要領』（以下「現行要領」と略称する）によれば、外国語科の目標を「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」としている。本稿では筆者が教鞭を執る高等学校での中国語教育を紹介し、現行要領の目標を実現するために、2014年度以降どのような授業実践を行ったのか報告をする。そして、2017年3月に公示された『学習指導要領』（以下「新要領」と略称する）での「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善の推進」ということを踏まえた上で、今後の課題について述べたい。

1. 学校の状況について

筆者は2009年4月より東京都杉並区にある私立中央大学杉並高等学校にて教鞭を執っている。2012年に出版された同校の記念誌によれば、開学した1963年度から1981年度入学生まで、選択必修という形で三年次にドイツ語かフランス語を3単位学ぶことができた。1982年度入学生より第二外国語はなくなったが、1994年度入学生より、自由選択科目として三年次に第二外国語4単位を履修することができるようになった。この時、ドイツ語とフランス語に加え中国語が開講された。1994年度入学生より4単位を履修できた第二外国語だが、2013年度入学生よりカリキュラムが変わり、2単位となり現在に至っている^[1]。

さて、これまでに筆者が担当したクラスの履修者数は

2009年度が32名、2012年度が29名、2017年度が33名で、これ以外は定員いっぱいの35名であった。学校の話によれば、希望者が多い場合、抽選により35名に絞るそうだが、中国語は希望者がますます増え、2016年度からは2クラス開講するようになったとのことである。筆者が担当をしないもう一つのクラスでは2016年度が35名、2017年度が32名ということである。つまり、実際の中国語の履修者は2016年度が70名、2017年度が65名となる。年により学年の人数の前後はあるが、おおむね一学年300名程度であるので、中国語の履修者は一割強、2016年度以降は二割程度で推移していることになる。

2. 教材について

次に教材について述べる。筆者が着任した2009年度から2013年度までは筆者が別の高等学校の中国語教員と編集し、印刷をした私製教科書『しゃべってわかる！中国語』^[2]を使用した。2014年度以降は『しゃべっていいとも中国語』^[3]を使用している。本稿では2014年以降の教育実践を紹介する。『しゃべっていいとも中国語』の各課の学習内容は以下の通りである。

『しゃべっていいとも中国語』目次（抄）^[4]

第5課 姓と名前のいい方とその尋ね方、人称代名詞

第6課 動詞“是”，助詞“的”

第7課 基本語順S+V+O，連動文

第8課 助動詞“想”，動詞“有”

第9課 動詞“在”，方位詞，前置詞“从”“往”，場

所を表す指示代名詞

- 第10課 数のいい方, 値段のいい方, 形容詞述語文
- 第11課 日付のいい方, 年齢のいい方
- 第12課 量詞, 動詞の重ね型
- 第13課 時刻のいい方, 文末の“了”
- 第14課 時間の長さのいい方, 完了の“了”
- 第15課 前置詞“给”, 助動詞“可以”“能”
- 第16課 動作行為の進行, 助動詞“会”

この教科書は第1課から第4課までは発音, 第5課以降は文法というすみ分けがある。文法事項は各課とも2項目で, まれに文法事項と関連のある別の項目をさらに取り上げることがある。それぞれの文法事項のあとには練習として日本語を中国語に訳す問題がついている。第5課以降本文のある課では会話の練習用に「ワードバンク」という補充単語がつけられている。そして, 各課の終わりにはドリルが設けられ, 聴きとり, 並べ替えなどの練習が付けられている。

高校三年生の授業のため, 授業時間は思ったよりも少ない^[5]。この教科書は使ってみると, コンパクトにまとめられており, 少ない授業時間で中国語の基礎を一通り教えるには, 手頃だという感想を持った。一学期で8課までを, 二学期で14課までを, 三学期で16課までを学習し, 教科書を終えている。しかし, 生徒からすると, この教科書は簡単すぎるようで, 二学期も半ばを過ぎる頃には授業にあきてしまう生徒もいるようだ。

3. 実際の授業

前置きが長くなったが, 実際にどのような教育実践をし, 現行要領の目標の実現を目指してきたのか紹介したい。

3. 1. 文法事項の補充

前節で述べたが, この教科書はコンパクトにまとまっており, 手頃な教科書といえる。そのために文法事項の記述に不足が感じられた。その場合には教場で文法事項を補充した。具体的な例を四つ紹介する。

一点目は“的”についてである。第6課で連体修飾語^[6]を作る助詞として取り上げられているが, どのような場合に“的”を使用してはいけないのか, また, 修飾語が名詞のみで形容詞句や動詞句などが修飾語となる例が取り上げられていない。そこで, 人称代名詞が親族名称を修飾する場合などは“的”を使用しないことなどを補充した。

二点目に場所を表す語について補充をした。第8課で動詞“有”, 第9課で動詞“在”が扱われている。教科書では「主語(場所を表す語)+“有”+目的語(モノ/ヒト)」(39頁), 「名詞(ヒト/モノ)+“在”+場所を表すことば」(44頁)と説明がされている。日本語では「教室に人がいる。」と言えるが, 中国語では“教室有人。”とは言えず, “教室里有人。”とし, “教室”に“里”をつけることで, 名詞を場所としなければならないことはよく知られているところである。「方位詞は通常名詞のすぐ後ろに置かれます。」(44頁)と説明がされているが, それ以上に名詞を場所にする方法については説明がされていない。名詞を場所にするための“里”や“上”については教場で補充を行った。

三点目に前置詞を補充した。第9課で“从”“往”, 第15課で“给”が扱われている。第9課は「道をたずねる」という会話文を学ぶため, 道を尋ねるときに使う前置詞が取り上げられ, 第15課では本文に“请给我开一台电脑。”とあるため, “给”を扱ったのだと推察される。しかし, この三つの前置詞だけでは不足があると考えた。そこで, 第9課で前置詞が扱われる際に, “在”(～で), “用”(～で), “到”(～まで), “跟”(～と)といった前置詞を補充した。

四点目は数に関する表現で補充を行った。数に関する表現は第10課で扱われている。また, 数と関連して第11課では日付や年齢, 第13課では時間の表現が扱われている。第10課では説明には「200」までしか書かれていない。値段の言い方の例として「2750元」(50頁)が挙げられているが, いずれにせよ100以上の数については不足が感じられた。また, 2について“二”と“两”の説明がはっきりとなされていないので, 補充を行った。

3. 2. 語彙の補充

この教科書には巻末に単語リストが載せられている。そこには299語が掲載されている。ただ, 次節で紹介をする作文練習をするには不足を感じた。それを補うために副教材として単語帳や, 現行要領第2章第8節第4款「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」の(3)に辞書の活用とあるので, 辞書を買わせることも考えた。しかし, 経済的負担などを考慮し, 2013年度まで使用した『話せば分かる!中国語』の語彙リストを『中杉初級中国語単語帳』と称し, 冊子にして単語帳として辞書の代わりに使うよう配付した。この単語帳は『話せば分かる!中国語』の本文で使用された495語など^[7]を課ごとに, そして, 作文や会話練習のための補充単語と

して、品詞別に五十音順で配列した455語を合わせた950語に、中国の省名と省都と直轄市を載せたものである。中国の地名などを合わせると1000語を越す語彙リストを生徒に配布している。田村2017の調査によれば2012年から2015年までに刊行された初級中国語教科書16種の中で最も語彙の多い教科書で1022語が使われており、最も少ない教科書で349語が使われ、平均で609.0語が使われている（田村2017：67）ので、「中杉初級中国語単語帳」はかなりの量の語彙リストといえるであろう。

3. 3. 作文練習の充実

筆者は現行要領の目標を実現するために、作文練習を行った。前節までで紹介した文法事項の補充や語彙の補充はこのための布石である。

筆者が作文練習を取り入れるようになったきっかけはある意味で偶然であった。授業はお昼休みのあとの5校時と6校時で、最も睡魔に襲われる時間といえよう。発音をするときには、しっかりと発音をするが、文法の説明を聞く段になると、耐えきれず寝てしまう生徒が多くなる。そのような中で、文法事項がしっかりと定着しているかの確認をし、また、教場で説明したことを寝て聞かないでいると、困ることになるということを体験してもらうために少し難しめの作文練習を行ったことに、この教育実践は始まる。

具体的な例として、2016年1月16日の6校時の授業で実際に行った作文練習を紹介する。三学期の最後の授業で、次の週は学年末試験というタイミングである。教科書を一通り終えて、最後のまとめとして作文練習を行った。

授業の学習活動及び指導内容は表1の通りである。

この授業で出題をした練習問題は次の8題である。

- ①高校生はタバコを吸ってはいけません。
- ②私にちょっと見せて。
- ③バスで駅まで行けます。
- ④田村先生は毎日コーヒーを10杯飲むことができます。
- ⑤私は明日韓国に行けなくなりました。
- ⑥あのレストランでちょっと休んで良いですか。
- ⑦ここで食事をしてはいけません。
- ⑧サイダーはどこで買えますか。

表1で述べたが、基本的にこの作文練習は生徒一人一人ではなく、特に指示はしないが、2～3名程度で、近所のもの同士がお互いに協力をしながら作文を進めていく。この日、展開1は25分であったが、内容によっては短くしたり、長くしたりと微調整を行う。解答を添削するときには筆者が考えていた模範解答と違う答え、具体的には語彙が違うなど、ということがしばしば発生するが、明らかに非文であるもの以外は誤答とせず、語彙の解説を行った上で、筆者の模範解答を紹介する程度にとどめる。最後にリアクションペーパーを書かせ回収し、質問に対する答えを次回の授業で返却することで、生徒の理解していないところを発見し、フォローを行っている。この時間は生徒達の考え方を知るよい機会であり、ここでの情報が授業にしばしば活かされていく。

4. 今後の課題

本稿では筆者が、現行要領が目標とする言語の理解を深め積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度を育成するために、作文練習という授業実践を行ったこと

表1 学習活動と指導内容

	学習内容	指導内容
導入 3分	・板書された練習問題をノートに書く。	・練習問題8題を板書する。 ・板書しつつ、私語などを注意する。
展開1 25分	・ノートに書き写した練習問題を解く。 ・前後左右の生徒と共に単語帳で単語を探したり、作文の際にどの文法事項を使えばいいのか相談をしつつ、作文を進める。	・机間巡視をしながら生徒達の学習活動を見守る。 ・質問のため挙手した生徒がいれば、そこに行き質問を受け付け、指導を行う。ただし、答えをいうのではなく、ヒントを与えるのみにとどめる。 ・様子のおかしい生徒にはこの時間積極的に声かけをし、生徒の状況を把握するように努める。
展開2 18分	・答えを板書する。 ・板書された答えと自分の答えとを見比べる。 ・教員の添削を見て答え合わせをしていく。	・カードを使用しランダムに生徒を指名し板書をさせる。 ・板書された答えを添削する。 ・似たような意味の語、例えば“能”と“可以”等はどの場面ではどちらの語が使えるか、或いはどちらの語も使えるのかなどの違いに目を向け、理解が深まるように解説を行う。
まとめ 4分	・授業の感想、質問、意見などをリアクションペーパーに書く。	・次回授業が最終回で試験を行うことと、試験範囲について説明を行う。

を紹介した。このような授業実践を通じて筆者が重要だと考えるのは次の三点である。

- ①教員が必要以上に解説をしない。
- ②生徒一人で学習活動を進めるよりは、数名でのグループワークのような学習活動の方が、より有効である。
- ③主体的で深い学びをするためには量も必要である。

授業担当者が文法事項などを、ある程度の説明する必要がある事はいうまでもない。しかし、授業担当者が授業の多くを説明に費やしていると、生徒は主体的な学習活動ではなく、受動的な学習活動をする事になり、積極的な態度を育むことができなくなると思われる。また、生徒一人一人の個人的な学習活動では、その個人の持つ能力の限界のために、学びが深まるころまでは進まないのではないかと思われる。生徒同士が教えあい、他者の知恵を借りることで、自身の限界を超えて深い学びへと進めることができると考える。そして、様々な表現をするためには、どうしても一定の語彙量が必要となる。その語彙量の不足を補う方策は教員が用意しなければならないと考える。ここで筆者が考えた授業実践の三つのポイントは、新要領の「主体的で深い学び」の実践にも欠くことのできない視点だと考えるし、新要領の施行にともない、ここで紹介した三つのポイントを実行し、「主体的で深い学び」を進めるよう授業展開をしなければならないと考える。

本稿では作文練習という「書くこと」での授業実践を紹介した。今後の課題として「聞くこと」「話すこと」「読むこと」といった、「書くこと」以外での言語活動において、新要領の「主体的で深い学び」を進める工夫をする授業を考えていきたい。また、作文のように教員がお題を出すところから、生徒がさらに一歩進み、自らの考えで言語活動を行えるように改善をしなければならないと考える。さらに、辞書だけでなくICTを語学の授業にいかに応用していくかについて考え、実践していきたいと考えている。

注

- [1] 記念誌157頁によれば初級ドイツ語、初級フランス語、初級中国語は2単位とされているが、4単位の誤りだと思われる。
- [2] 2009年に池田 晋・館野 由香理・田村 新・長谷川 賢による共著で、私費により出版した。主体的に会話を組み立てられるように、空白補充などによる練習を多く取

り入れた。また、中国をより深く理解してもらうため、様々なコラムをつけた。

- [3] 陳淑梅・劉光赤2010『しゃべっていいとも中国語』。東京：朝日出版社。
- [4] 紙幅の都合があるので、学習内容のみを編集し記した。また、第1課から第4課は発音編なので、割愛した。
- [5] 2016年度は実際には23日間（46時間）、2017年度は24日間（48時間）の予定である。つまり、大学の一コマの通年授業と同じ程度の授業時間なのである。
- [6] 本来中国語学では「定語」と呼ぶべきだろうが、本稿では国語や英語などで一般的に使われている術語を用いることとする。
- [7] 一部に“太～了”や“欢迎光临”などを慣用表現として一語としたり、“做作业”という形で「宿題をする」という動詞で一語とした。

参考文献

- ・田村祐之 2017.「中国語初級教科書の語彙に関する調査（2012～2015年度出版分）」、首都大学東京人文科学研究科『人文学報』513-12：65-74頁
- ・中央大学杉並高等学校 2012.『50年のあゆみ 中央大学杉並高等学校 創立50周年記念誌』。全166頁
- ・文部科学省 2015.『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』。東京：開隆堂出版
- ・文部科学省 2017.『中学校学習指導要領解説 総則編』。
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afeldfile/2017/07/04/1387018_1_2.pdf (アドレス取得日2017.7.25)